

大黒さまという、頭巾すきんを被り、右手こぶちに小槌、左肩ひだりかたに大きな袋を背負い、二つの米俵こめだわらの上に乗っている姿が思い浮かびます。

七福神しちふくじんの一人としての大黒さまは、「大黒天だいこくてん」と呼ばれ、仏教しゆごしんの守護神ごこくで五穀ごこく豊穰ほうじょうの神様とされています。福ふく々ふくしいそのお姿は正りやくにご利益えんぎそのもの、縁起えんぎものとして捉とらえられており、新年が明けてお正月中にお参りする習慣があるそうです。

歴史を辿ると、大黒さまが米俵に乗るようになったのは江戸時代からと比較的新しく、もともと大黒さまが生まれたインドでは、マハーカーラといい、ヒンドゥー教けしんのシヴァ神ふうろうふしの化身であり、不老不死の薬を持つ戦いの神でした。このために古くは棒を手にしていました。

これが中国に渡る頃には台所の竈かまどを司つかさどる神様となり、油あぶらで拭かれて黒くなったことから、「大黒天だいこくてん」と呼ばれるようになります。また、日本に伝わった時に、土間どまと座敷ざしきの間の柱はしらに祀られたことから、「大黒柱だいこくばしら」という言葉が生まれました。昔の家は広い土間に台所がありましたので、名実共に家の中で重要な場所となったのです。

日本に伝わった大黒さまは、神道しんとうの大国主おおくにぬしと神仏習合しんぶつしゅうごうをします。竈かまどを司つかさどる神としての「大黒天だいこくてん」と、豊かさの象徴である「大国主おおくにぬし」が合わさり、大黒さまは農耕の神様としての位置づけがなされたのです。

恵比寿えびすさまと一緒に踊る「大黒舞だいこくまい」という、今でいう獅子舞ししまいの様な舞踊ぶようが江戸時代に広まったことから、ご利益がある農耕の神様としての姿が定着していったといわれています。

また、大黒さまという、禅宗のお寺では一般に、住職ほうじょうを方丈ほうじょう様と呼ぶのと同じように、お寺の奥様を「大黒さま」と呼ぶことがあります。

大黒天の像は、お寺では住まいであり台所のある庫裏くりにお祀りをします。このことから、大黒天をお護りしている方かたとして、尊敬の念を込めて「大黒さま」と呼ばれるようになったのでしょう。住職と奥様がいわゆる両輪りょうりんとしてお寺を護っていることから、尊敬されてきたのだと思います。

お寺で大黒さまの像を見かけたら、菩提寺の奥様のにこやかな表情を思い浮かべてはみては、いかがでしょうか。